

田嶋 宗成の山を以てのものか
 ○此書明治初年の者書風作文
 などに興味をもつて居る者の仕事
 ならんが性来の俗物と見え
 筆記もさういふ味を帯びて居る
 りみ有り細く巻末に寸草の
 解白ありしと他の者書と違
 泥濘誤字

特別
 イ 4
 3159
 B64





○ 今様

○ 祿四季

蘇峰稿

春白井 跡をの 曙に 四方乃

山 連 延 久 庵 せ い 花 十

う り 心 重 花 枝 の 寄 心 ぞ

な り 多 連

花橋を白ふたす軒のあや

めを薫る大市り又暮すすの

五月雨に山郭公谷のり

~~~~~

秋のさあともあふぬれ

今年花年ハまはけ運我

まわり  
~~~~~  
うたのてふ丸見

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~



冬よりの朝ほろけし

山路の雪のあはれ

けう祿と毛おまひ

あまは奈礼

中納言行平

いぬ夜明の浦に浪よせし

字まづ川に別れをおまひ折るに

あまれをそとて啼く鳥



○ 俣 市子


君をよみて見よ時二十代子

稚女  およば池の

○ 氣 同に鶴ふそむきおて持ゆれ

○ 祇 王

蒼菜山に干とむる万歳干

秋うすな水里松の枝に鶴葉 

○ 岩せし  枝



○ 後徳大寺入將實定

古時都を十帛てりぬれ浅茅原

とそ成にける 月け光り

てし

秋風のまを身にけし

能はるや

人にとらむとをうめ

人の怒るをいし

いりや欲とすて、あそ

常の心のあらし

いそても心ごとく知るや

さしもあ、流いとくま



心にとめてもどらなく  
幸にあらば廣く

いかにきく人の子

いとくさくさ月てん

尊しくはそ人ぢれい

いふてあぢも

くすと  
す可也

すのわくそ月のをめ

此のちくさそ花のいせ

手言と風との有てあそ

月と蒼とのとさりれ

山城の野のうらの血作り

血をい人にあしと守る夜

あまういに成めれい血を

花に川い流たす



あめふれはあせきをさゆさ  
 みつわけをやすくもろいと  
 ねりさうをしむらなへ  
 そのいねよまほにさかじぬ

〇 口

田中道磨

まみの江なるたぬにさをとめ  
 あせうあぬいねかりてよ  
 おろほらへこらそ申も  
 むきさあはぶつくれや



いさわこらみふ申たえせぬ

幸 我子等 御恩頼不絶

かむろきを つねおやまへ

皇祖神 常 禮

おのもよにちほまゑとめて

已 在 猶 未 留

うれしくそちほひあけし

喜 悦 幸 福 有

あはれ 幸 福 有

あはれ 幸 福 有

あはれ 幸 福 有

あはれ





太真夫人玉卮每彈一絃  
琴即百禽飛集時來

白龍周遊四海



按孫登字公和嘗聞魏末時

居白鹿之藹門二山彈

一絃琴善嘯每感風雷





仁九ノ義ハ長角ノ禮四角  
智ハ五角ノ信ハ六角

青ハ天ノ黄ハ世界ノ赤ハ日ノ  
白ハ月ノ黒ハ土ノ

〇  
天得一以清地得一以寧  
神得一以靈谷得一以盈  
萬物得一以生侯王得一以為  
天下正其致之六无以  
清將恐歎

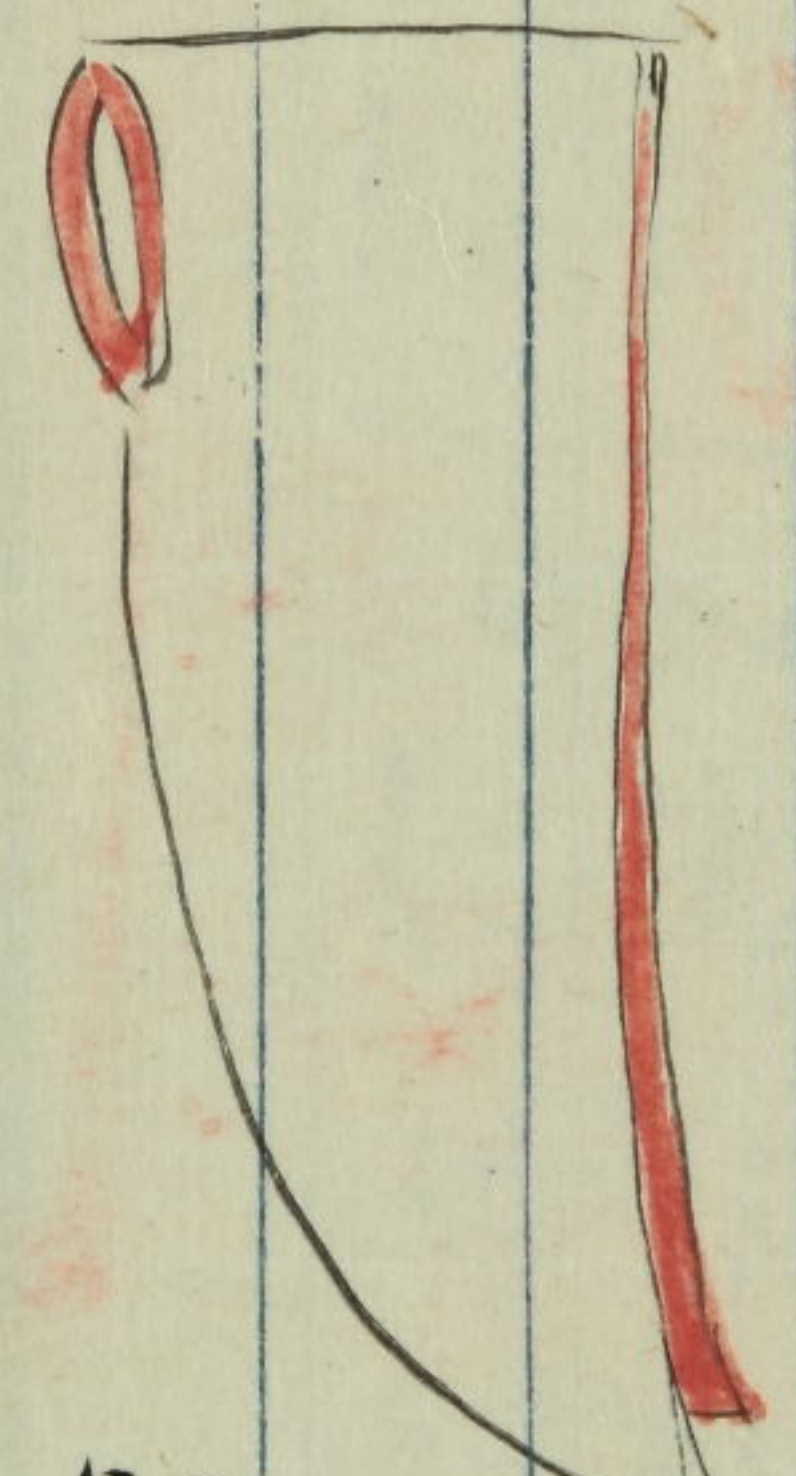
右 溥仁帖中 臨秦李斯書



田之神の  
 永きい申  
 養ひて  
 今今神  
 といふ  
 とお  
 て天地  
 糶糶せ  
 世の  
 けい  
 ち  
 た  
 えて  
 り  
 れ  
 め

い  
 か  
 包  
 た  
 ち  
 神  
 神  
 の  
 神  
 の  
 神  
 の  
 神  
 の  
 神  
 の

袖きそ



振袖の  
 振袖を  
 あ  
 や  
 む

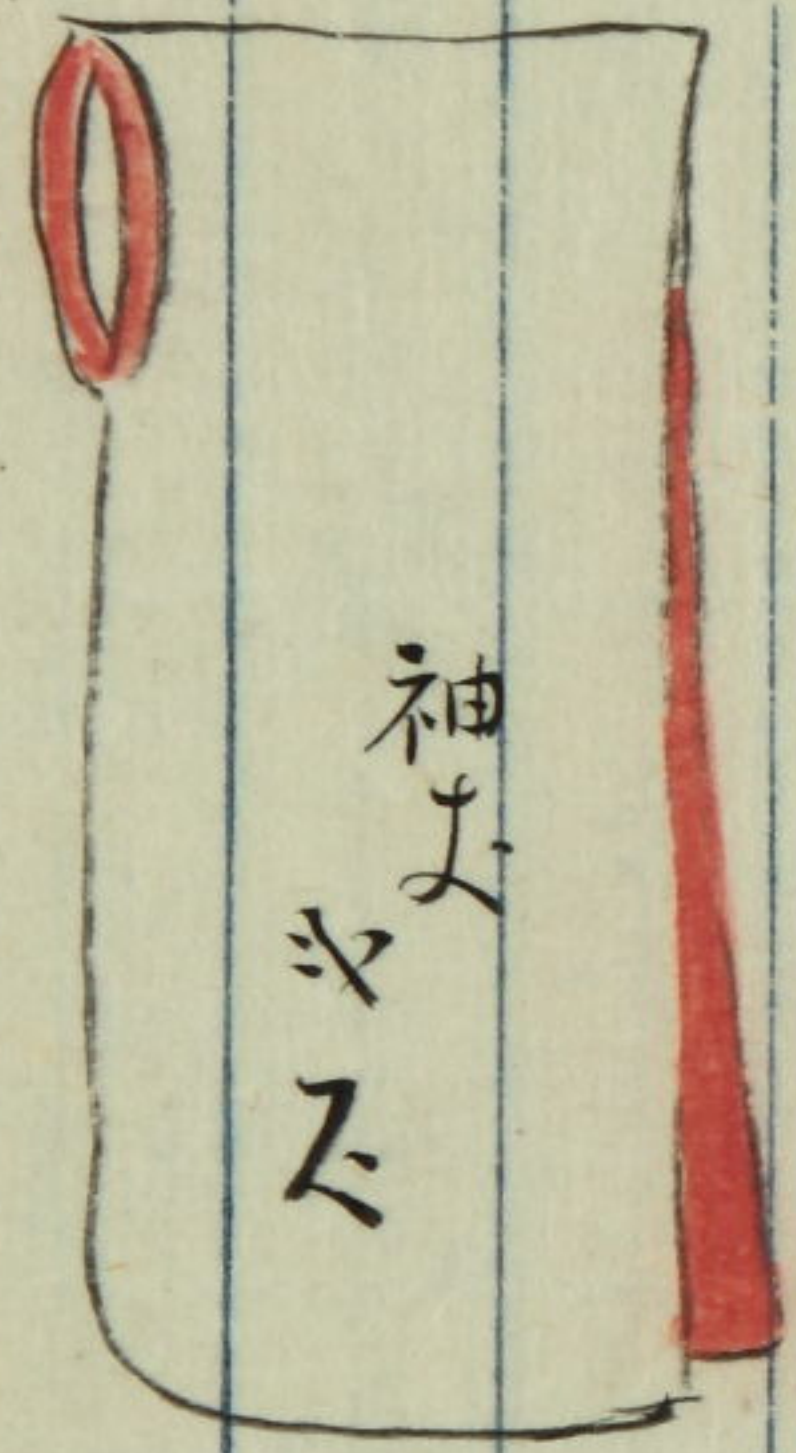
元和の  
 寛文の

袖丸



袖丸  
 延宝  
 お  
 大  
 神

袖くさ



袖くさ  
 六尺袖  
 神  
 八尺袖



○紋所の来由替紋とゞ一紋のみ  
 昔に親子をいふに付て同一紋所とな  
 なる事となりしに西に其感ある所  
 を取て考へて定むるに故に  
 幕の紋をあらはしにありき  
 幕のあらはしにあらはれ替はる  
 たくいそして花紋と替はるの別  
 なく取とめさるる事のおぼしき

う最明寺殿北條時頼公家の紋直きに  
 毎目まきそとおをもれらると作あり  
 よりおのつゝ諸國にうらんの家紋を  
 用て定紋の家に傳へて替はるるを法  
 例とせしむるにやまはく一門の  
 学はしそをえてはらるるにせしめ  
 されとそかたき男の紋を女の身ん  
 りはらるるにやまはく一門の



としてくづ——て年々とあり其  
替やうにちよひありたしく本紋  
より年々おちて来——きいよ  
さし——九廟——たるいあ  
又本紋いぢいぢい——替紋うがれ  
た、落よて年々——或ハ一度  
感つるとおち又ハ嘉例とちよるへき  
るやを後年に上とまきさるやうたに  
身をえちしめ衣腋調度よくにそを身  
るやをむへちりその時付し年の家の紋  
を表紋と——その好むよの紋を裏  
紋と定め陰陽令くせんるや天長  
地久のえちりことちよるん  
替紋とつ——紋の方法あれと  
すれい後と云べし



伊村恒山座七歌

面忘るる事なすを

おもしうはなすを

こころなりしを





美女不の思情さ嫌  
二満子と平於龜於德  
於多福為是息災

正令名

頰高いとうま  
ふさ子那いとうま頰去  
たりといとうま出る

事いとうま

鼻低いとうま

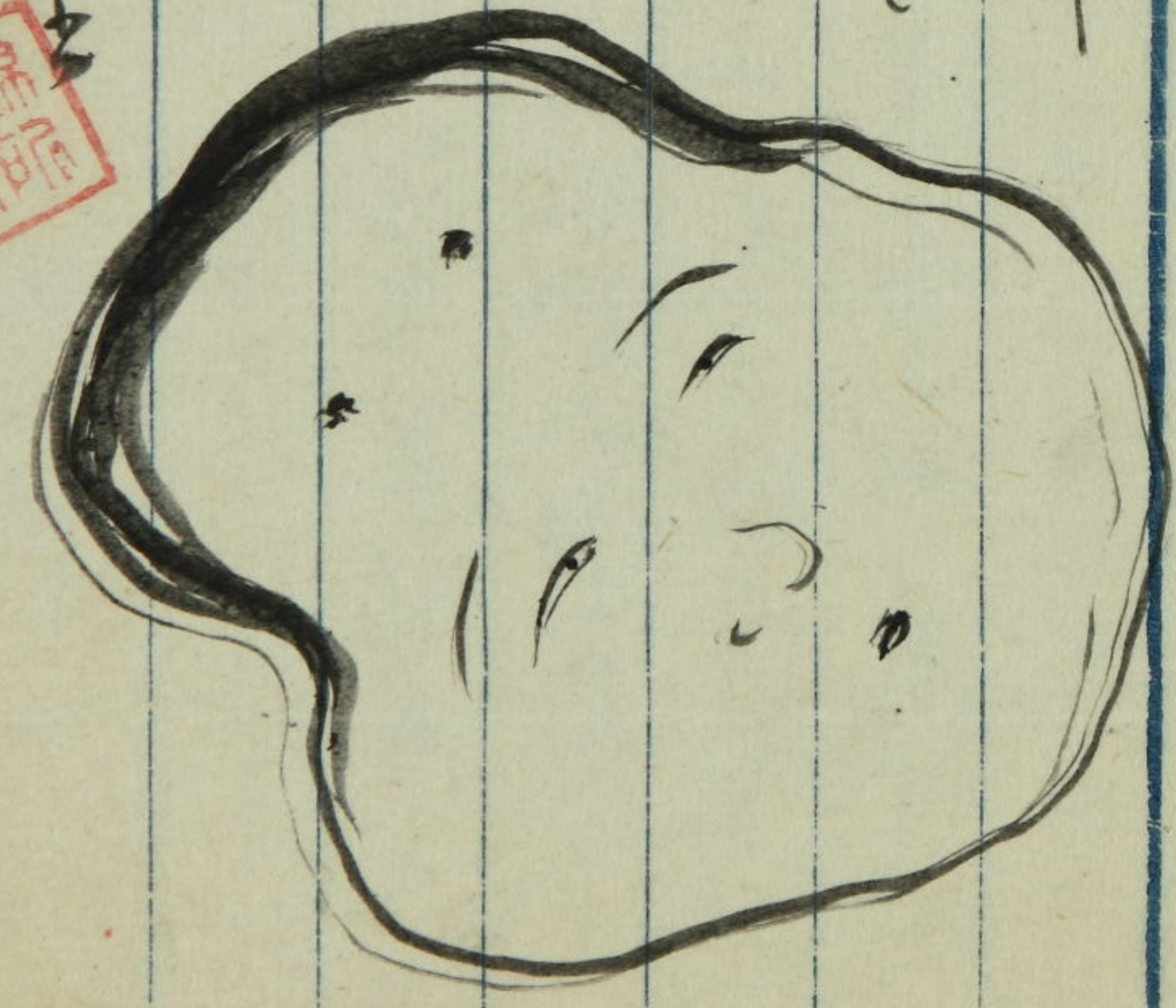
いとうま

心甚

高

陪謝春星画

後子録





○ 飲酒の十徳

礼を正し 功をいとし  
憂を忘れ 毒をいふ事  
病をさけ 人と親しむ  
毒を解し 人と親しむ  
縁を強し 人を延ぶ

○ 酔 郷十宜 明日執衛之曰

酔花宜昼 酔雪宜夜 酔月宜樓  
酔暑宜舟 酔山宜出 酔水宜秋  
酔佳人宜遊 酔文士宜飲  
酔豪士宜揮 酔知音宜作樂

○ 酒家之戒

志思昏一也 度時失事二也  
失言敗度三也 右謝左祝之言



春の月... 花

と花... 一

夏月... 婦... 花

花... 一

秋の月... 花

花... 一

冬... 一

花... 一





○山家今様曆

深所山樵子

大陽のほる一月八日女にまさら

寒の標を薰ひおふくにて茶の花を

椿の花と束つれ口しきまをいそふ茶開ぬ

二月そ甲巻文胡に君子に佩に

句ふ蘭福貴をすわく福壽草

谷に鶯やめふ



弥生也春ねも〜あとして 降すあ

小算をもらえて、梅ははるかに

音梅の糸よりほそき雨を降す

四月ハ春に中〜ちり花や様め

春盛に燕めま来 啼

廿二日ハ新貨幣とて

ウキクオ

見ゆ〜ん



五月に桐に牡丹菘子芍薬

藤の花葛蒲 甲のむ

欵冬色きそよ 初郭公

ヤニフキ

音そ甲

夏のむ ぬれ六月に茶摘

茅種や麦實持り合欵や

ネム

柘榴に百合葵若鯨

川敷をのぼる也



今とて毛羊ふれと其れ

中ハ廿七月ハ蓮華鶏頭

夕顔の光りあふふ花

八月子ほ——槐咲朝うほ

こゝろ盛りに寒蟬啼ハ

ヒラウラシ

綿の蒼木槿ヤ暮ハ色紅



九月ハ秋のちとめとち小秋  
をまに女涼巻目と月ハ  
たしハ夜蹄道のあそれそ  
凡ち〜ん

十月ちりて残り衆持深山の  
紅葉錦きて色に出たる  
于町田村実のりよまいたる

美草持巻



十一月、雨降、野々山へ  
手枯れて、橋の實のてらに  
首さしして天の下あすねく

秋小時、中ぬ

十二の月、冬至、梅初雪降と  
松柏秀て、枇杷の花咲ぬ  
水仙平し、もかぬあらしを



○ 市祭祀日を知る今様

一月一日四方舞 三日元始の祭日よ

二月十一日紀元節 四月三日神武祭

五月三日天長節 日章の旗立て

祝ふらん

○ 大小を知る今様

人さし指さしと股さし股

ふしと教へたふしにあはし

大の月股あはし小と知れ



○國府縣知事今様

王室御政となりて。府ハ三府

方、セ

○國の數七十三國

六十六縣置給ハ蝦夷

樺——太——其所ナシ

○傳信線ハ東京より西京まで  
長崎や奥の海、南部まで  
北海道にまで通る

○七曜ハ日月火水木金土ニ  
シメテ、日曜日に  
休暇の日とぞ知れよ



○ 疋蟲 養良 起体知了 今様 兼 女訓

蚕の卵ヒ化ハ八十八夜五月十日余

るて志体

又升タ体ケふ奈体ケの虫食に

庭おきして 七日目に巢ア籠カて

ふ。め 繭と成

○ 蚕を飼て 繭を得て いとよき

糸を川あけて 絹をそ織て

裁縫して 衣履とちよき 婦女の

道

右に 明治七年に係るやまぢりりる

大陽曆ぢりりつれいさせる 遠もあ

さしきりりる 年くに心味と

あしたむるにぢりり



○ 友とるに信あるを  
明友に父子の親あるにあん君は義  
あるに非ん夫婦兄弟の恩ある  
にたんと然るに聖人明友を以て  
五倫の一に置か遊の情親の  
送に談論し道義を講究する  
の益ありて父子は親を君臣は義  
を夫婦兄弟は別序を朋友の

らるるに因て其理ありをのちれハ  
其關係する所に重きもの故五倫の  
一に在りし詩經の伐木に視彼鳥矣  
猶有求友声矧斯人不求友生ト云ハ  
能く朋友の情を述しむる人もなれん  
れハ花月を見ても山水を看してそ  
たのしみ浅し鳥獸の如きそ  
鳥ハ友を求むる声あり鹿ハ群に



草を食ふるに毛啣々と鳴き友を  
そとむる声ありハ天機自然の情  
況人ハ道義切磋の益あれハ相交  
親むへきなり久キ中には  
送ふに逆耳の言もあらず矢礼の  
るもあらずハ是ハ相怒りて  
小礼を責む大義を全たふさへし  
伐木ノ詩ニ民之失徳軌饑以懲ハ

云り明友の疎濶ニちるも石の飲食良  
小礼の事にて心樂しませるものあれと  
そそハ小事ナレハ送いに宿怒をへ  
爾適弗来靡我有咎ト云も能明友  
宥怒の道を述べたりハ明友の間ハ  
相親しみて居申す事愛に至り其力を  
得るものと多しハ昔和氣法唐  
在人真人豊永にをり事跡唐土に毛



け例多くあり其皆明友の力に因  
て節義を令し養名を千載に  
留の其益あると多し故に聖人  
の士倫の中に至れしハ意味深  
長の事と云なり

右の良春閑話中

○ 齋蝨婦

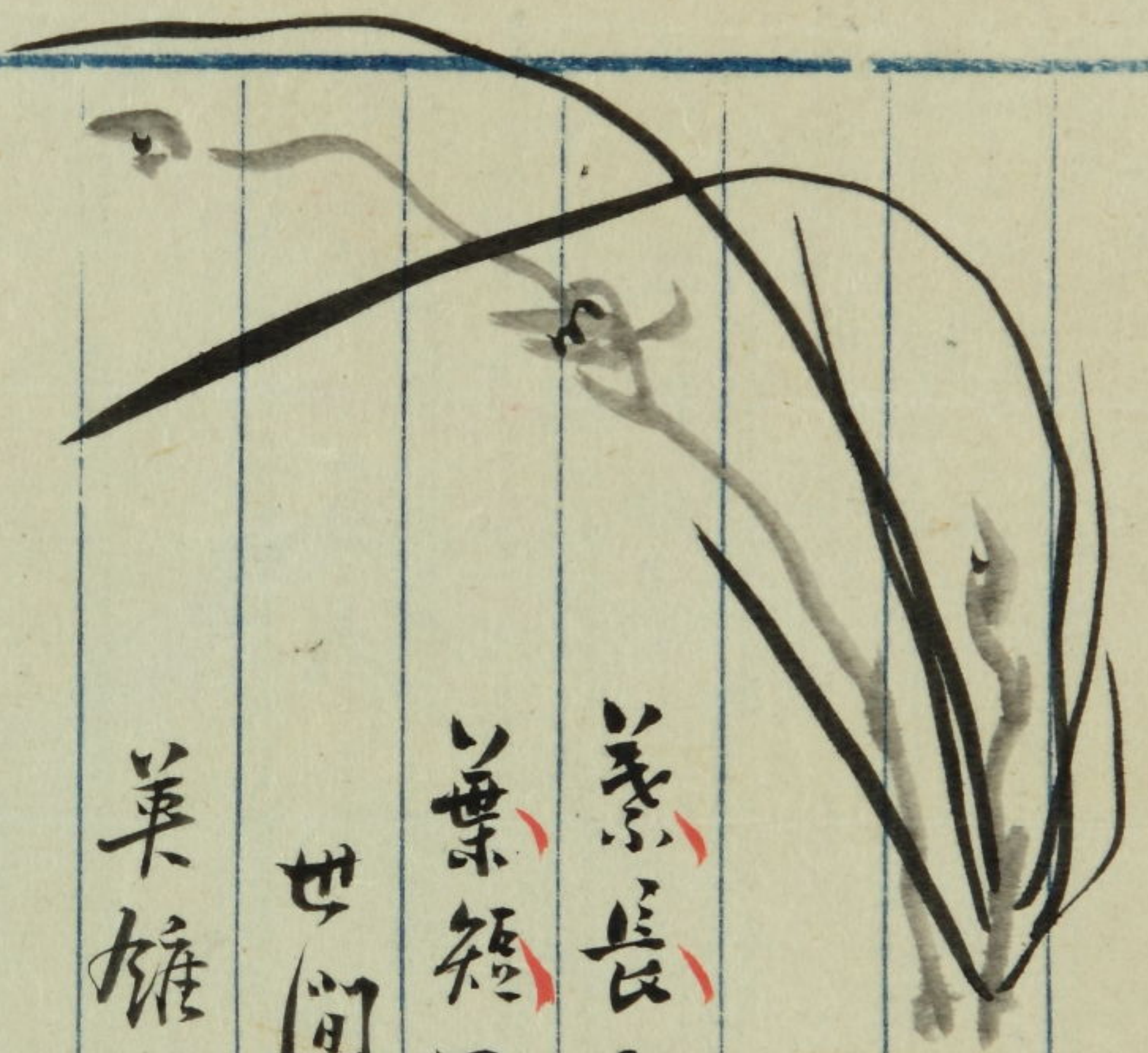
無名氏

昨日到城郭 歸来涙満中 遍身  
綺羅者 不是 養蝨人

出城帰家有感 下涙見不養者  
皆衣羅綺 不知養蝨之辛苦

重泥護草をとりける時 匣中より信紙に  
解さきまきし字をみるありけれと見れ  
春婦の詩予も涙のあまきと載て同好の詩一覽云





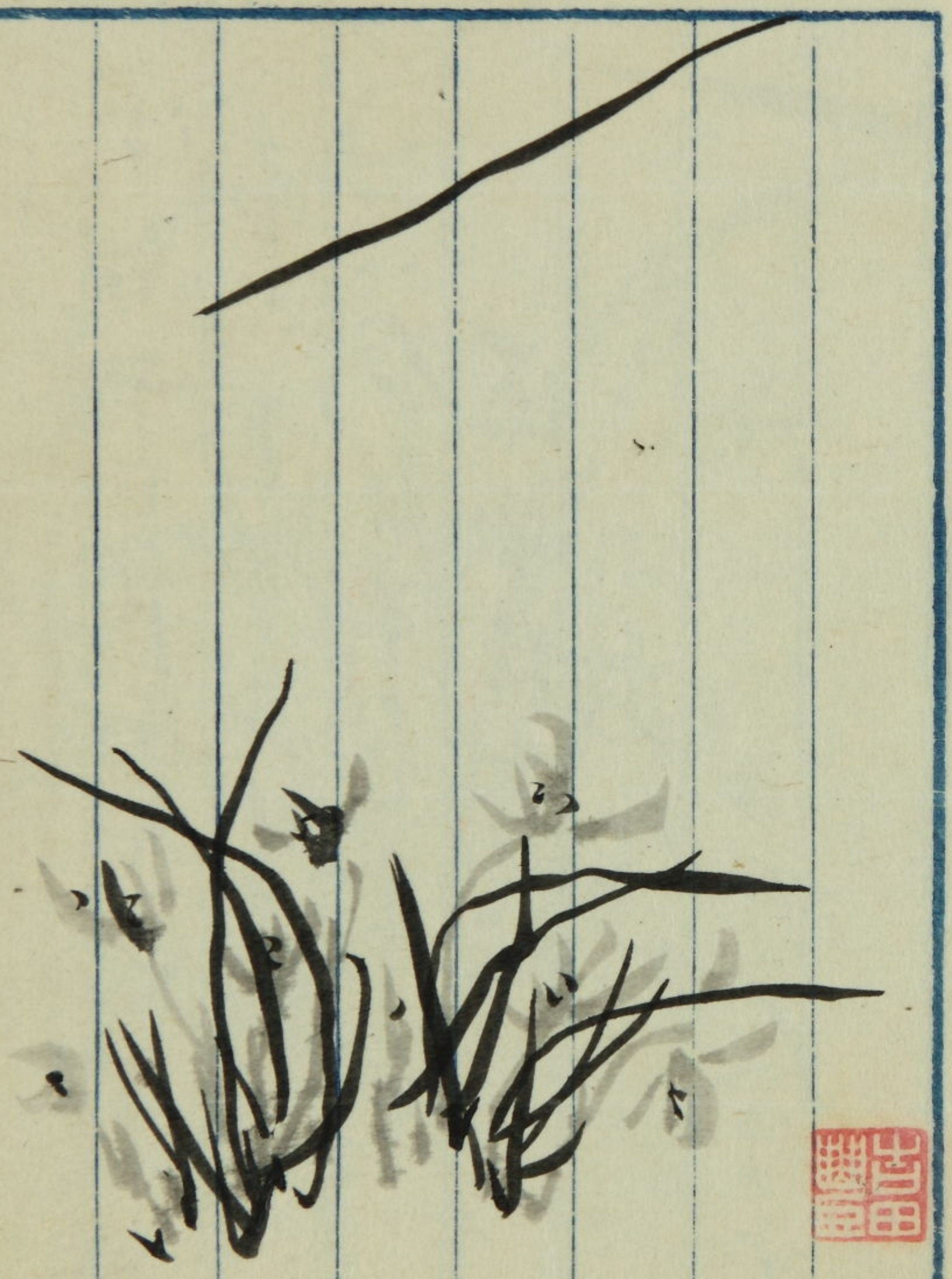
葉長則花少

葉短則花多

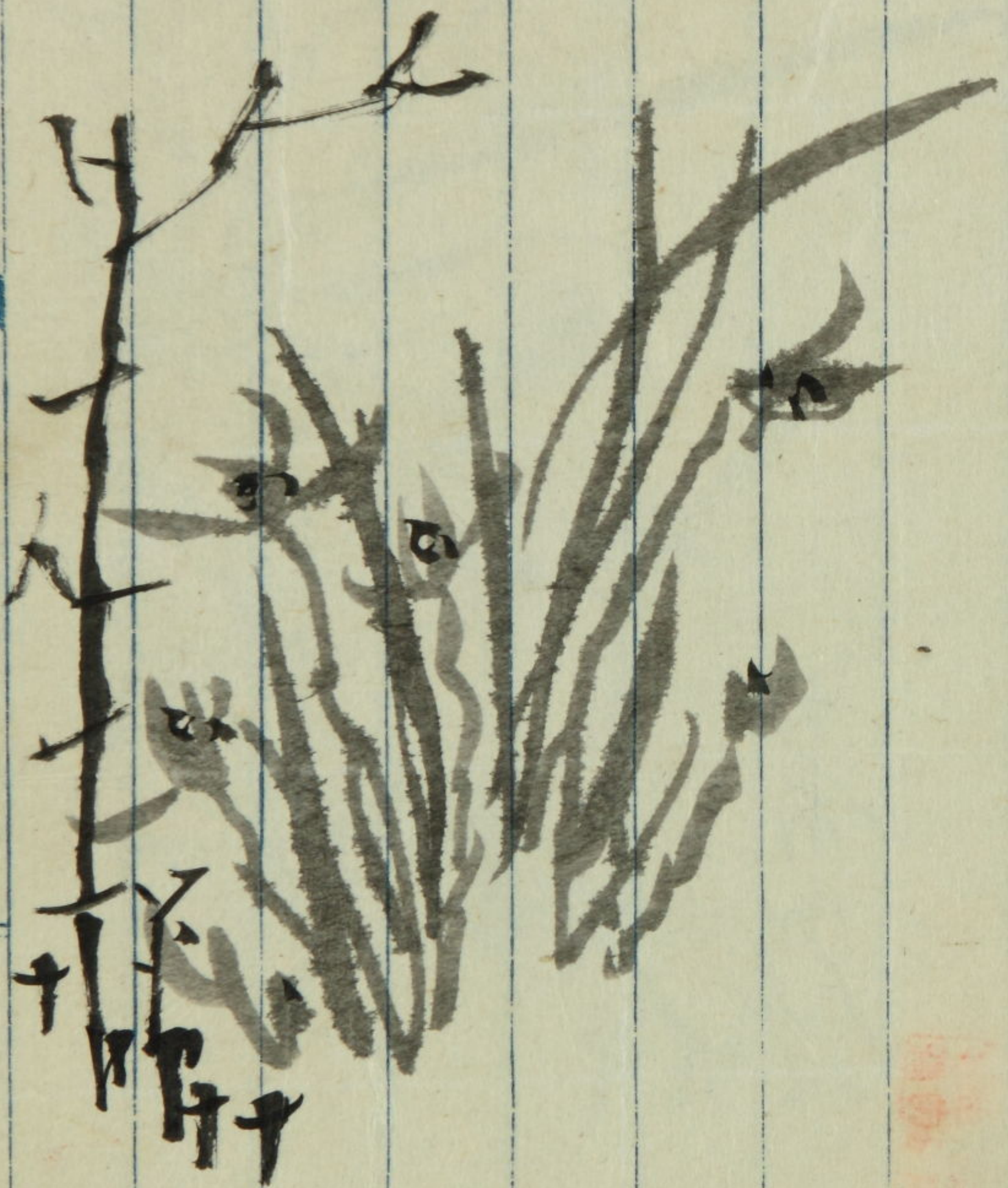
世間有餘不足

英雄直取傑以

為何如







江南四月雨如絲  
 滿山玉葉詩琴詞

廿二日自序

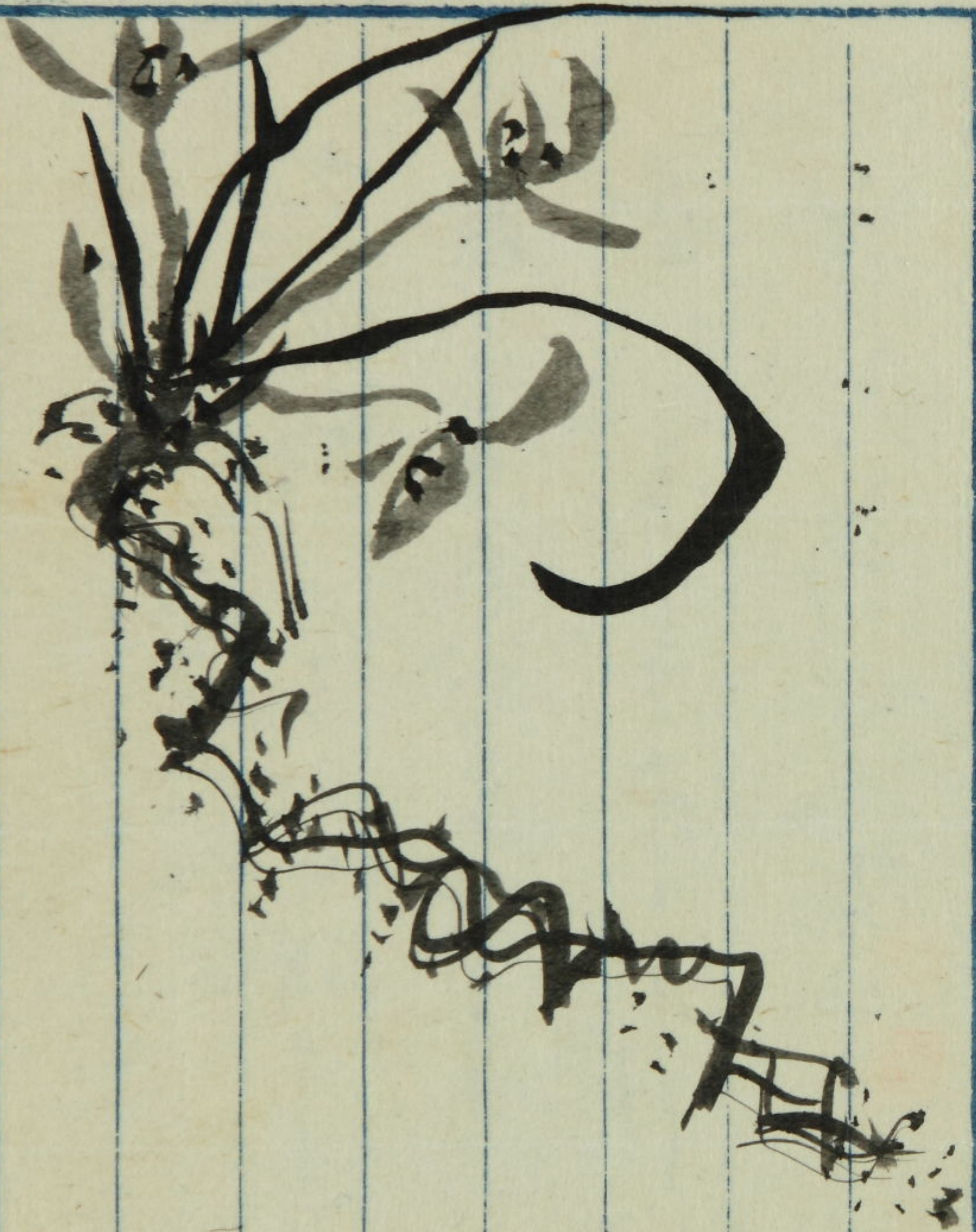
還謝長芳誌

不要人知

徐所少一







時人並愛可

臨一本如字

念明月字

碎借

徐所少人





○

利休居士七條

花を野のまねの様

崖の湯乃おまをるに

夏涼九

冬あか

別眼

降

相

茶事極密秘子せと



○古書とよき  
 唐人の待歌  
 と吟し  
 香を焚大  
 古法性  
 玩心出  
 とのそと△

○ 貝平家 家訓中 抄に 書る 條

獨り 家に 居て 閑りに 日を 送る。  
 △ 月花を 免て 月影を 求し  
 四時 好景を 求て あそび  
 世を 微醉し にも  
 園 草を 煮て 茶を 飲む  
 亦 一 室を 暮らす  
 名 師の 人 にも 比た なる

常 一に あり けり  
 一 葉を 煮れ けり  
 富貴に 一 たる こと  
 高き 人 にも 下り けり  
 貝平家の 好い こと 漢人  
 沈え 環し 書斎の 快事  
 彷彿 たる こと  
 ことを 左に 録す



黙坐對月 明牕淨几

擊枝頭殘雪 漢瓶揮新花

宜炷焚異香 酌玉卮

陳古瓷器 讀得意書

手談不出一語 新笋晚蒼時

薄醉 教天邊雁字



凡人の業へまゝ三つあり一に

道とけいひをう事なく

善をよぶにあり二に

身に病なくして快く心を

にあり三に命をく

久しにあり富貴

にてもけいひの内にあり

心に善をよぶも又美意生



の道と云ふに——て身は病多く  
其もてい短命なる人にて是業を  
得る人となつて亦是業を得るの  
えうりつと云ふ人い有へ〜  
此之業をば是人もいふちある  
大富貴を極むと云ふ益なるを  
小は養を乞ふの歌に  
人の世の富に〜

お〜千石の風を

ま〜川官の笑りちのまを

又〜人のお〜

智者のい〜

我唐の山と水とに

ふ〜

徘徊に

秋とや葉起しやあき雪の片



○ 家の零落を興へたり

明石の里脊鳥おのこをへつ老年の食  
旅の日に諸子身一族を合集し  
席といて留て曰くう家幸にも災し  
うとんといとも水旱の時をさるあ  
そと人子不時の害感もあるれを  
吊り死して後窮乏もたさるるも存  
へしさとあつゝ先一妻に居宅を

奪ふんしまたにもふせられぬに重宝  
と奪へし次に諸器物衣履をこり  
赤裸を田地を作ると心付へし大百姓  
といえる、者窮乏のそめにいそくに  
重寶を質物とし次に諸器物衣履を  
質物とん次に田地を質とに奪ふ次に  
居宅を質居宅をこれと手と身とに  
成てさよる方なきにいそる小耻を知り



大耻と為る事愚と云へし一妻に居定  
と賣るに高時いそぢなれとも夫に準して  
あつうを省畧され引かへさ此理を以て  
意にあつる事と田地さへあれむ取つ  
なう事おそ汝ホ必小耻を知て大耻を  
おねぐる事なうれといひしと云やこ違  
播磨情絢の事記より見へし王と蜀山適事  
にのそは論を極せり仍び中可なり

て我と操る久せてもやと思ふと人記にぬ

○ 如きものにこそなると云

り平の中納言より傳来なりとて  
おのふ秘飛してきたる是孫子大天  
斗一の列名を指し人ありしか松風の  
うの海士のまの事なりしを彼  
り平の君は身不持得しれりるにせ







南京の法講の古傳年にて音器用申す  
蓋の上に空あるものあり是を軒  
蚕シラミを入る器なりとぞ人あり又虫を  
入るゝ入るぢれと鈴虫を入れて枕邊  
にきて糸イトをむ器なりとぞ人あり  
何れも是ぢるゝ後めぬる糸の張を  
や  
因に器を用るのそにあらん人

あて候まじい有へん 一言申す  
そ人の玉腕の見ぬえれるものなり  
古句に

にあて玉腕の見申す

あやばい邪

報いこつを賞カウせられと時と氣に  
よりしうけを拂くゝあゝ馬麻  
のむき身も鈴にまさる時あゝ

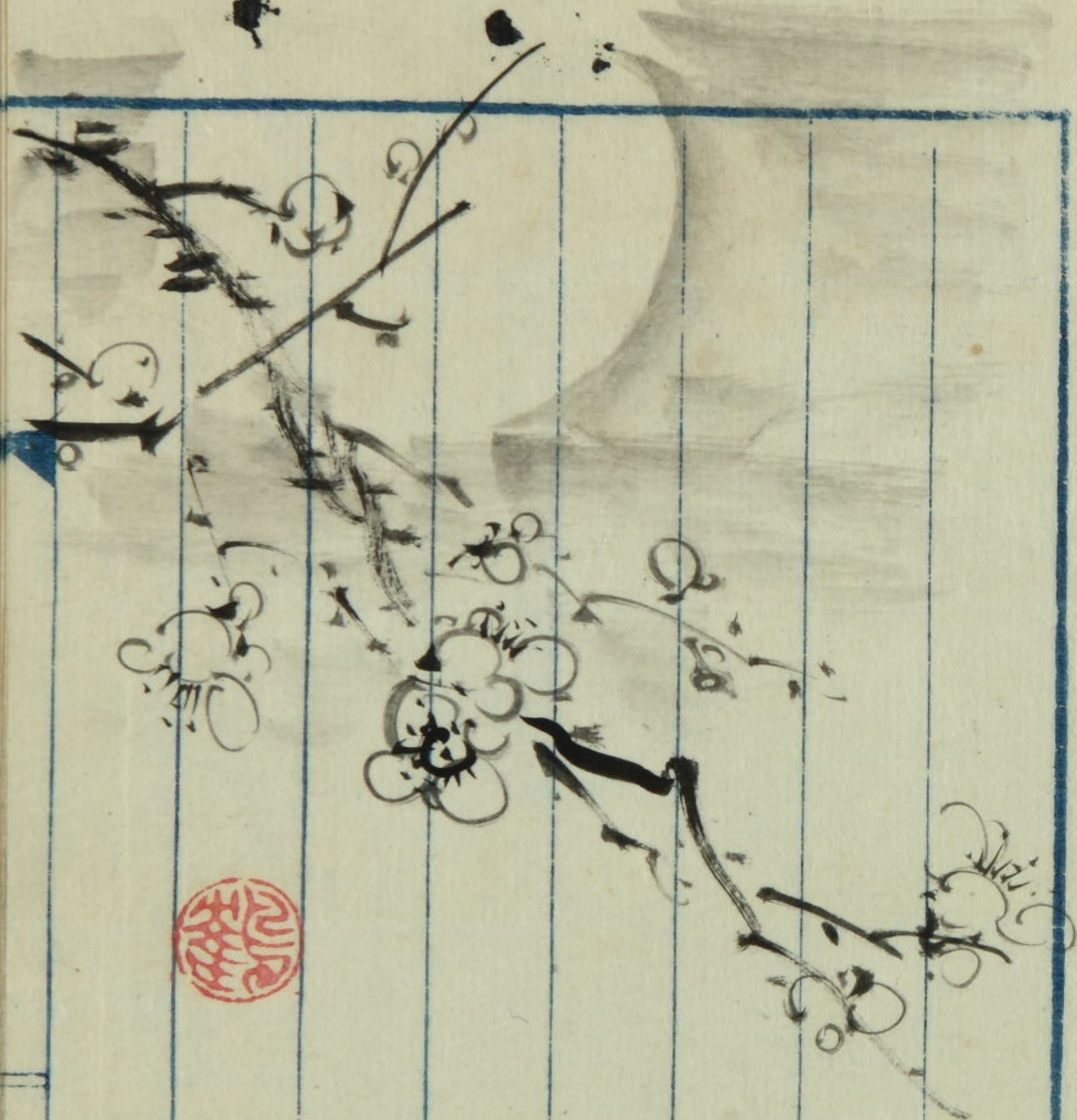


海老に似しとヤコ田螺と似し  
バケありとさよりに似たモノあり  
田舎人「さ〜」て心「〜」て言へ  
た〜

真正學士不耻為賤業耻之者  
非真正學士真正文人不嫌為俗  
發嫌之者非真正文人

日本學術家 中村正直





夕月夜  
のほろり  
た小河  
の  
枝うほぬ  
花うけ  
て



多秋  
本元

高  
年  
子

千  
二  
系  
縣

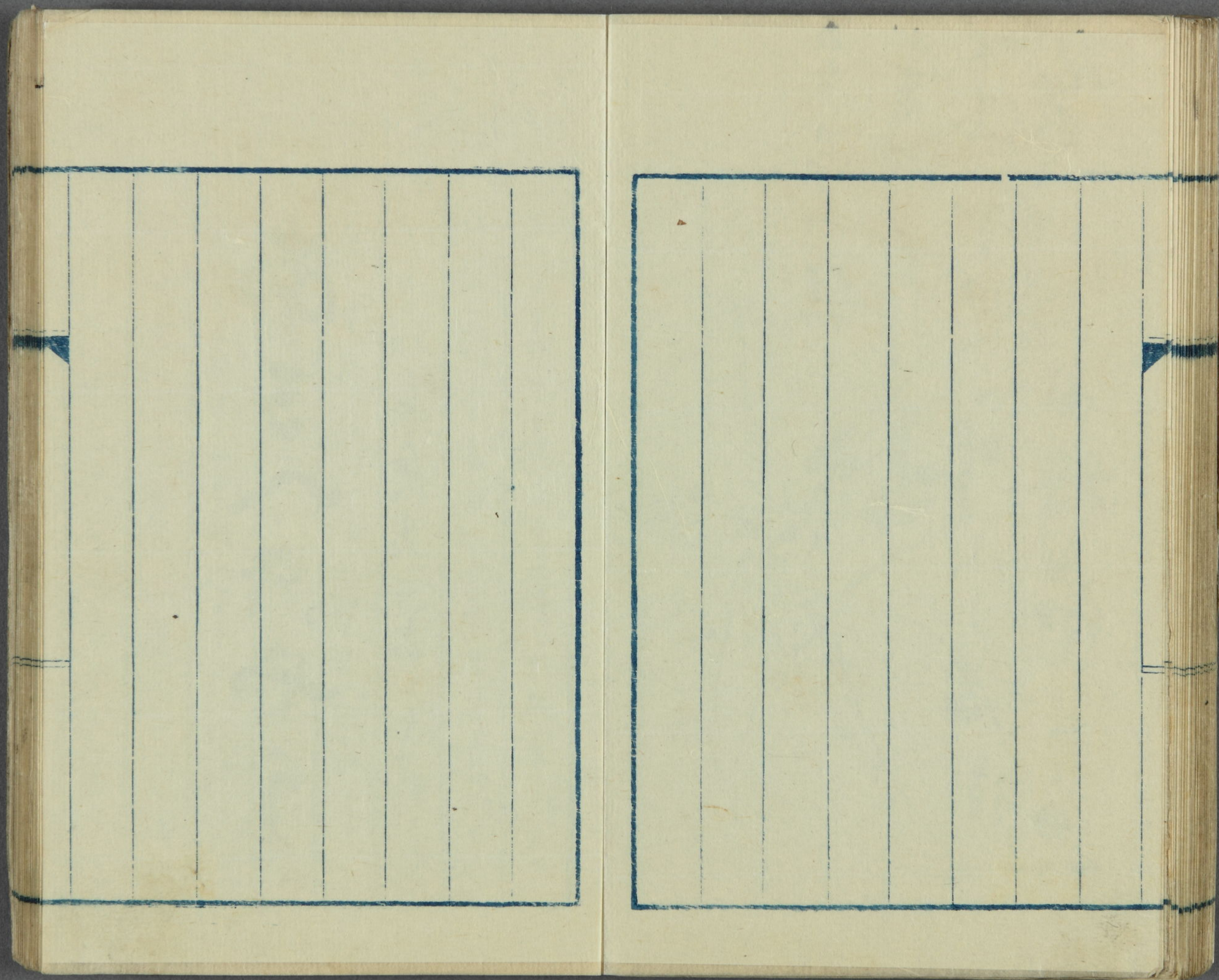
下  
總  
田

郡  
下  
海  
衛

小林  
電  
一





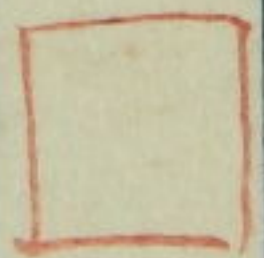




中澤道二先生真蹟

あらずんば

中沢道二書



後學 藤野野矢人臨

道二翁ハ道ニ一語十五卷ハ人  
ハ實氏ハ者日ニ座ニ坐シテ  
其ノ語ヲ著シテ其ノ席ニ曰  
道ニ中沢翁ハ馬ク聖學ニ志  
手鳩堵蒼々ニ視矣一可ニ聞ハ  
と清ク倦ぞ一旦豁然トシテ性理ノ過  
奥ヲ洞悟シ磋磨ノ切積リテ道ヲ諸邦  
に唱ふるニ其言卑近ニシテ其意思沛遠



ひるを以て平綫も畢と標を皆世に  
感化せしむ群衆集はる者定し市に  
向ふるのみ ト思ふ

亦前人の門人鳩翁道徳に曰時仁と  
中より平竟トント各理のちいと中  
るして 志ざり せんは各理のちいのが刻  
人の心トやと孟子を作らまき た  
は各理のちい心を以て親にほへま

ととと孝行も なり 主にほへ ま ともと  
忠に なり 夫婦兄弟朋友の間も又  
は通して五倫の道ハ や とも に 通ひま  
そ各理のちい 仕 振を親を親のあへま  
や う 子ハ子のあへま や 夫ハ夫の  
あへま や 女房ハ女房のあへま や  
はあへま や 各理のちいと あ り と 別  
仁 なり 又人の心であさ り 子 を ま



道ニ翁道活茅と編中

。花に蒼み系にみ禁に候言いで教

赤法の道

。發し中峯の庵巾儀の浪これと

法のみありしりも

。法義理の心を知るべきの中一の賣買

ありものを説くも

。和永或部、小或部を乞たてし時

有りにて来て親よありなるを知らと教て

あり子に伴しり

。あいくと近きりしけきむつやしく心に

不足あれは不足

。生れ子う次牙しに智慧つきて仏に遠く

成るそかなし

。欲得し人の心と降し骨に積るにつけて

道をとらしり



酒錄九節之一

郭子曰三日不飲酒覺形神  
不復知酒自引人入勝地此為  
密文緣

曹魏禁酒人竊飲之因諱言酒  
以偽者為聖人濁者為賢人

酒考

世上一事一物俱各有原始或原  
始不知則是懵然昏昧之人矣好  
酒者何可不知酒之原始乎予因  
畧指數端以備統考

聖人賢人

已去上

卜夜

祭禮

和勁

酒有和勁唐子西名酒之和者曰養



生主勁者曰奇物論揚誠奇名  
傳之和者曰金盤露勁者曰板花  
酒

黃封

醒醉草

魯酒

酒材酒母

錄事

軟飽

青州從事

小變

十日飲

以之谷者文畧之



弘法大師の御書

- 一 大乗の異見
- 一 密中の大食
- 一 法華の所由
- 一 密教人の推察
- 一 密教の教化
- 一 密教人の見物
- 一 密教の奥言
- 一 法師の腕立
- 一 下天の教意
- 一 習經の道
- 一 菩提の出仕
- 一 醍醐の物語
- 一 遠處の財宝
- 一 出仕の難談

一 上下の實際

右に大乗加部 安んずる

一 密教の御書

一 密教の御書

一 密教

一 密教の御書

一 密教の御書



よき事ゆゑのこゝろにまゐりて  
しるす事なれば

ちかぢかといふは  
よき事なれば

小のこゝろにまゐりて  
しるす事なれば

思ふ事なれば  
しるす事なれば

思ふ事なれば  
しるす事なれば

まのこゝろにまゐりて  
しるす事なれば







新體詩抄序

我日本國よ長歌たる三十一文字たるの  
川柳たる支那流の詩たるを換くは鳴方  
ありて月を見ては鳴り雪を見ては鳴り花を  
見ては鳴り別品を見ては鳴り矢鱈に鳴り  
ちりすも十分は鳴り盡すことを能くは  
んとなれば古來長歌を以て鳴れるもの  
なきに何れぞむこい返と稱たるること

こゝて殊に近世に至りては長歌は全く  
地を拂へる首換よする物に感動せ  
られたる時の鳴方は皆三十一文字や川  
柳や簡短なる唐詩と出掛けは其  
手輕なる鳴方をなればなり蓋し其  
鳴方の新しく簡短なるを以て見れば  
其由にある思想ともし又極めて簡  
短なるものたるに疑なく甚だ奇禮



なる申分が、知らねども三十一文字  
や川柳等の如き鳴方よそ能く鳴り  
盡すことこの出来る思志、線香烟  
花外流星位の思、過きまゝにまれ  
愛則者流の漢學者が唐詩を此を  
固より平仄不ものありて其詩たる  
一通、音律、叶いたること、ある  
疑なきと雖も芥子坊子主やして之を

吁鳴らるるたらんま果して心地よき音  
調りものたふか將に破鍋や雷木よそ  
叩くが如きものたふか、未だ知えざる  
蓋し日本人に取るとは支那流の詩  
ハ恰も之瘧の手真似若くは操人歌  
の手踊の如きものたふり、瘧、生れは  
瘧の真似をたう一人と生れて人歌の  
真似をたうもの又憫まらざるけんや



そとで我尋三十一文字や堅くくも  
唐詩の出来ざる悔しき何か  
暇組をたれどやもり古来の長歌  
流新體の名を付け負付けたが  
矢張自分免許の鼻高で和漢西  
洋ごちやまぜて人よ人刀も専一と  
人よ分かるも自分極め易く書くが  
一つの能見識高き人たる可味し

ちもつを笑いで笑一語に云ふ藝食ふ  
虫も好きくなれど多くの人の中  
よ、自分極の我尋の美譽を賛成  
する馬鹿たうとせむ安んぞ知らん  
我尋のちんせんかんの後言とても  
遂に八テ目の唐詩の如く人よ  
ちやさる、ことなきや 穴賢

山仙士識



西洋ノ長キ者ハ其體或ハ五七或ハ七五  
ナリ而シテ此書ニ載スル所モ亦七五ナリ  
七五ト雖モ古ノ法則ニ拘ル者トラズ  
且夫レ此外種々ノ新體ヲ求メント欲ス  
故ニ之ヲ新體ト稱スルナリ、

チヤールスキングスレー氏悲歌

山仙士譯

無常を告ぐる八相の鐘の音はるたそがれよ

三人の漁夫ハ帆を上げて、入り目を揃へて西の海に  
走りす船を進めども、妻子の爲に引かき  
心の中ハ皆同ト、又の虫船を眺めつ  
とまきよ向ひて来める、童子の外に餘念なく  
まろけに薄く子澤山、雨の降り日も凧の夜も  
洲に打掛くる浪音の、最ともまきまき  
かせがよやなぬ男の身、袖のいぬの、  
三人の漁夫の妻三人、日も西山に八相の

女子の身

其時ぎ



鐘も不のふ、く洞ゆれを、共、籠り、燈臺の  
火を挑んと立寄りて、つまのめら心のま思ひ  
窓のま洞けて眺むれ、驟雨やら暴風やら  
空打過ぐるむら雲、色黒くと物まご  
暴風、如何、吹け、水かさ、如何、増せん  
洲、打掛くる浪音、如何程までく洞け  
のせ、か、や、な、ら、ぬ、男、の、身、袖のいぬの、女子の身  
朝日か、やく砂磯よ、潮引き去りて其跡、

残る三つあ、屍が、三人の漁夫の妻三人  
歸らぬ旅、洞虫して、歸らぬ夫のなきから、  
髪振り亂し、ぬまがり、消る計、啼き入て  
目もあてられぬ凡情なり、かせがらや、男の身  
袖のいぬの、女子の身、一日も早く世を去れ、  
一日も早く楽をせん、屍の跡の砂磯よ  
寄せ来る浪のくだけ、鳴りたまや鳴れよ  
急、儘よ



シヤールドレアレ氏 春の詩

春の景色のどけきを、いかに好まぬ人あらん

冬、物事さびしきも、春、心のせのづから

とけて楽み限りなり、雪もみぞれもふる雨も

人をなやまぬことぞなき、のどけき、春の来る時、

北風強く吹く風、野邊、溪雲木、つら、

雨もこもりていと寒く、障子ふたきまを、

爐火近く圍居して、ねぐらの鳥、ことなると

されど嵐も雪も歇む、のどけき春の、来る時、

曇りがちなる冬の穴工、日影もろほく、晝くくりし

されど春ももふりぬれ、まき、雲、つれて

光りどけき天を見る、いぶせく降り、雲、霜、

跡も残らば消えらせぬ、のどけき、春の来る時、

シエークスピール氏 ハムレット 中の一節

おがらふべきか、但し又、なごらふべき小罪るか



爰が思案のしどろろが、運命いかつたあきも  
これ不堪あが大丈夫か、又さへあらで海よりも  
深き遠恨小手向ふて、之を晴らぬがもの、あか  
どふも心不落ちかぬる、叔も死あんか死ぬるの  
眠るも同し眠る間へ、心痛のみか肉體の  
あらゆるろきめ打捨てる、是ぞ望のまてならん  
了、しぬねむるねむる時、一カが一ゆめみるならん  
ハ、こだわりが有るやうぢや、おせと曰ふ、死眠り

無常の風ふさふされて、此娑婆離れまふも  
いかなる夢のまぢやう、ハテ疑の晴れぬもの  
ろき事長く忍ぶのも、これが為めかな  
尤寸五分さへ持ちたれを、其切先でおせふれば一とつきよ  
事やあますもやまけれど、之をべ為さば慎み  
強者の非道世のそり、驕れる人のまぢか  
想ふ美人の不深切、緩み過ぎたる國の法  
貴人の無禮又た心、いか不善しとも下人の



輕しめらるゝ是れ其れ。堪へ忍ぶのへ何故ぞ  
重き荷を負ひて汗流し。ついでつらいでこそ一はく  
暮せぬ暮し暮しのも。亦何故ぞ是れみな  
死後の恐れがあらふぢや。死虫の山路の  
登りて歸る人ぞあき。如何あるものあるやらん  
物にぞくこそ思はれ。たゞ此世ホ止まりて  
ろきかんあんと尋るも。あの世は事、恐しや  
斯くと心は思ふ故。おけき心も弱くあり

如何ある深き大望も。

花を凋れ枯れ失せて

うたのなることぞなかりける。

左にきりあからオヒリヤよ。

了、たゞやかふ其風情。

そなたに神をいぬるなら

わが罪障わいてたぐ。



蒼顏如鐵擊之輒出牙石  
精、實耐人、子不、少、身、得  
是、後、明、寸、何、用、畫、難、滿

旌、法、元、欲、存、書、生、政、師、重  
山、子、里、程、不、如、後、乾、坤、浩  
厲、史、記、諸、世、態、與、人、情



白雲山之名雲飛來石  
人聚信之象流以於白雲  
裡政滿方遠事白雲由

快然白梅馬凱海拉付  
動身中甲第其是為久人  
君美志成五字是長城

我乃紅粧一物斜五湖春  
官好生涯越中乃有似城  
懼不仗天玉見艷美

老龍起跡略古因二表於  
於深又之乃於中極位  
振手中到 更是隆中



買是護屯、護買、志、志、  
也、久、留、不、久、門、先、回、志、每、意、  
其、道、先、屯、更、後、天、

至、龍、山、時、江、有、浮、江、搖、  
湧、至、就、江、而、舟、之、任、天、如、  
水、而、岸、能、風、

山、路、如、空、迴、以、更、各、海、風、吹、  
雨、不、死、如、外、但、之、子、亦、巖、之、子、也、  
人、在、中、

五、自、之、

幼、亦、如、是、志、如、性、清、柔、之、  
生、風、志、未、八、十、五、年、亦、易、乎、  
後、書、其、之、是、之、涯、



鞭打——  
多是排大牙  
一劍 偏至光底色毛塊

孤舟之上  
能定未幾場一自風流原坡  
孝功名不後日部

情如水養沙生  
卷一翻見  
志存波漂母飯買有鋪買

如葉如想  
可海清每離  
程、聲——  
種、聲——



四十四年一十四年志匪誤  
志用孤石亭一山石山亭  
故心桂川一石烟

孫聖名吳取極之性一失地  
振勇史持子休性此城道  
生古好人林編治於山

孫兮我畫汝一書孰為  
顏子與德若色道不取業  
志以美神色色三年王書  
能汝力詳 名於附說能  
傳能兮一象妻汝一又老  
宗學之清金裝燦爛以  
年回一勝如一百之子子



向世初敏以吐息握四海權  
靈兮我世汝德時運集  
變遷互至玉宋法後謹火  
闕旌國河魚香少用狗能  
必得醉六合未醉付酒仙  
瓶兮我承靈汝社靈酒  
玉愧王消且與平相與時以  
有流者生無酒却汝危生

時我未時汝能時對象能  
既一時一既吾子一云子  
之新通何更通

流友擲 志之博 休一  
掬清風三徑能金未亦從集  
飛派氣如子投白社得獨流



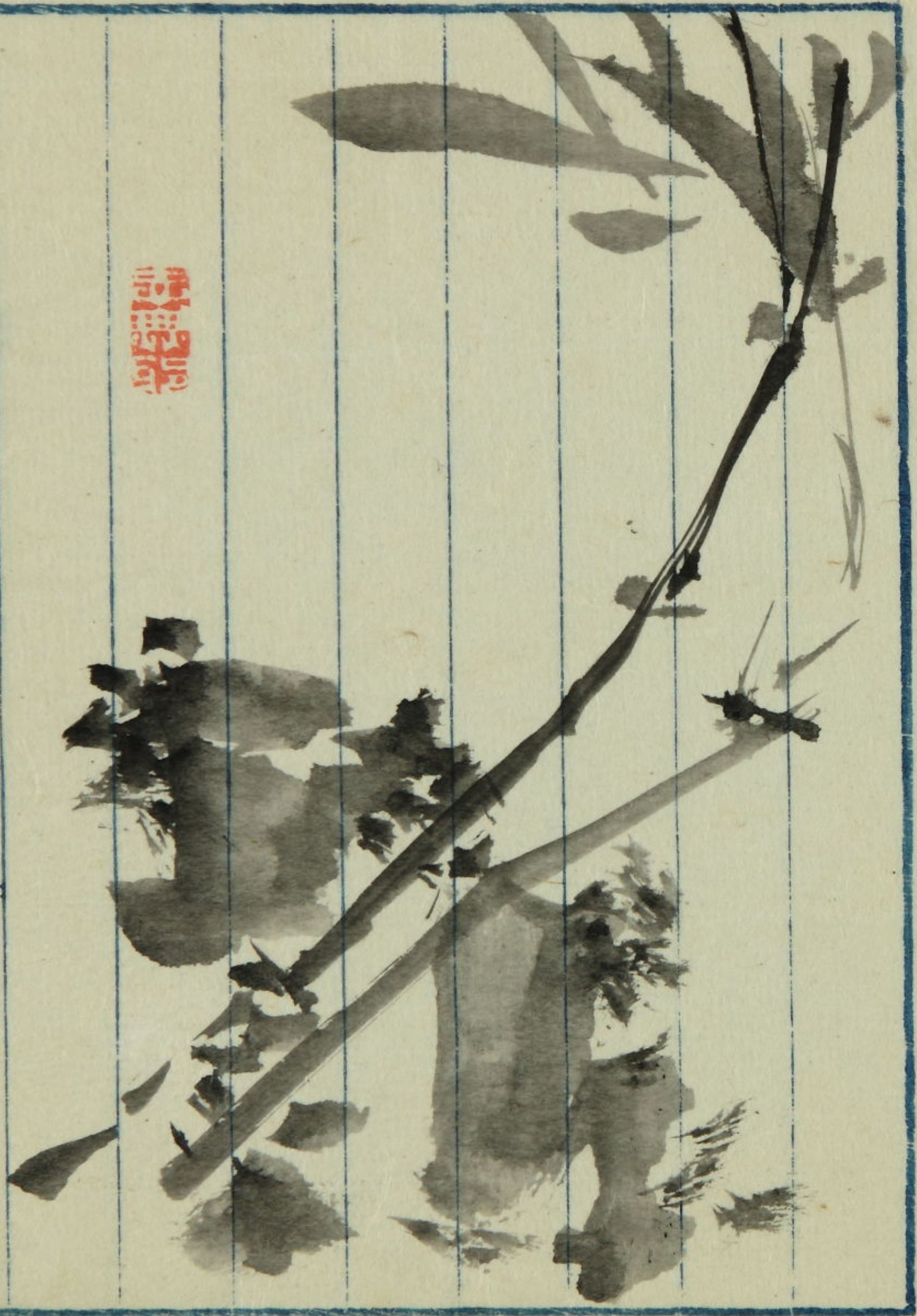
能如者士可士子也那云云  
離別情多者後心一劍好

佳以心回及外四壁能去山狂  
每思吾惡對中云云子月

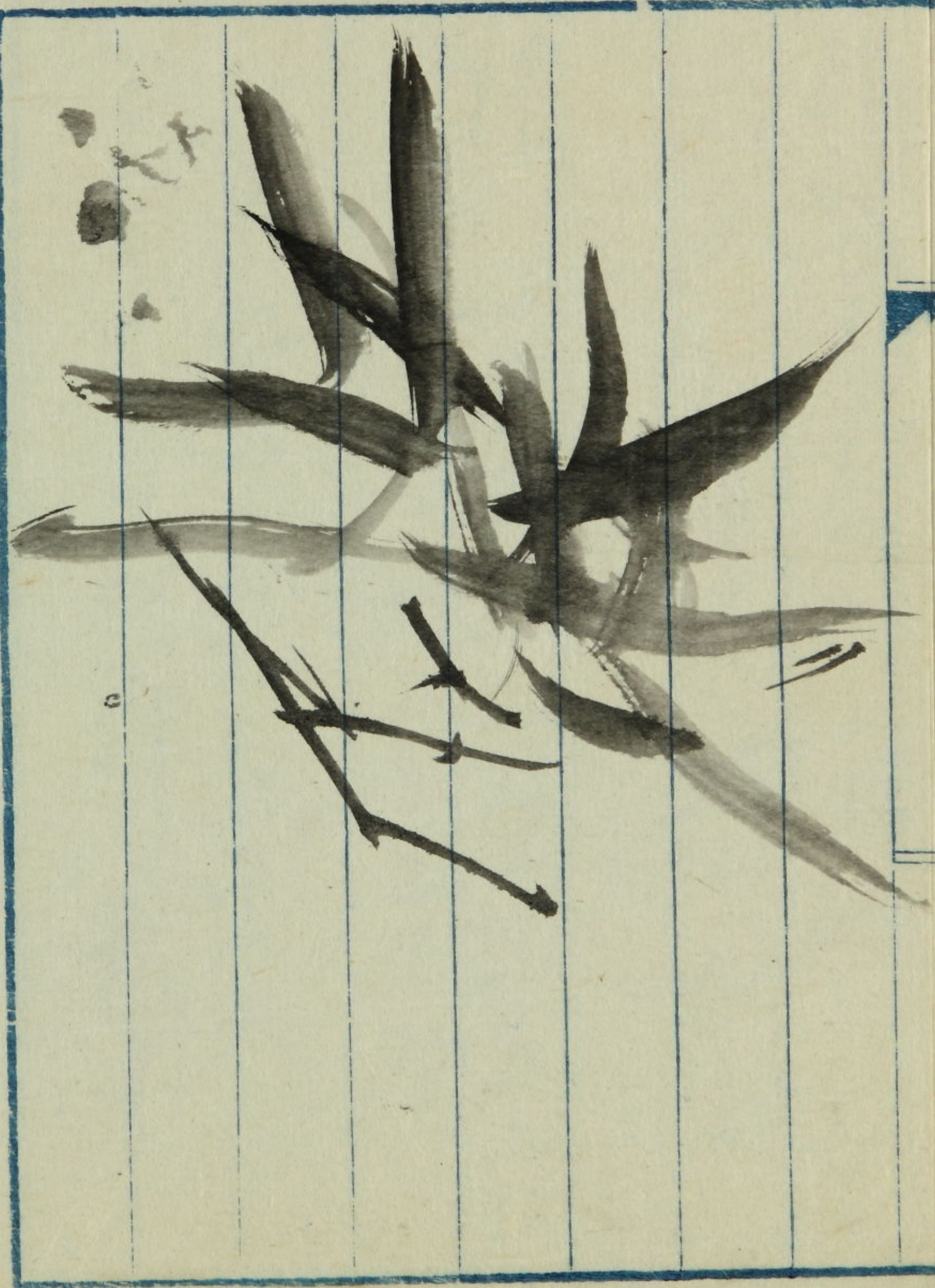
以上錄志人詩三平是

多一拜 裁書

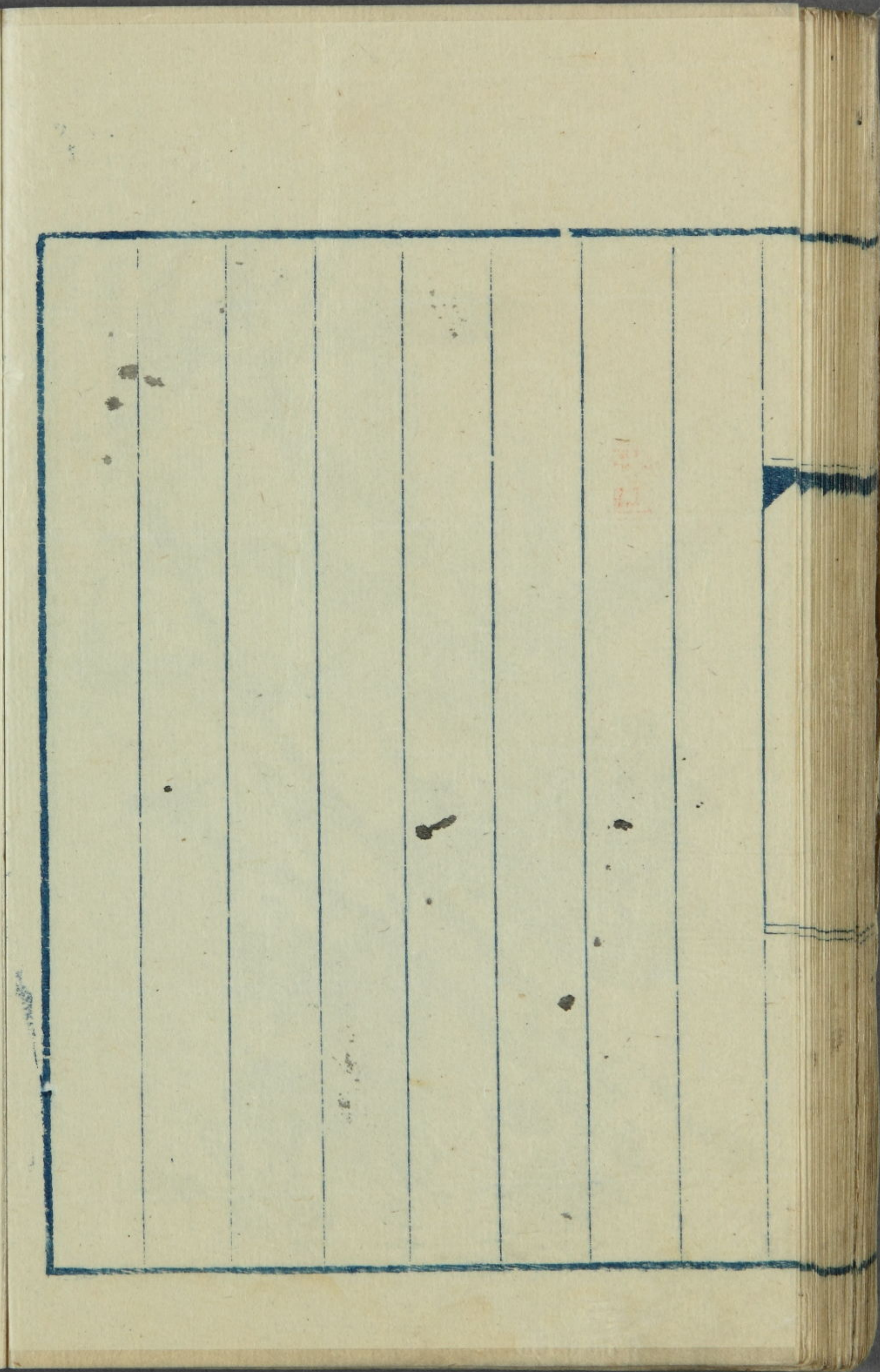
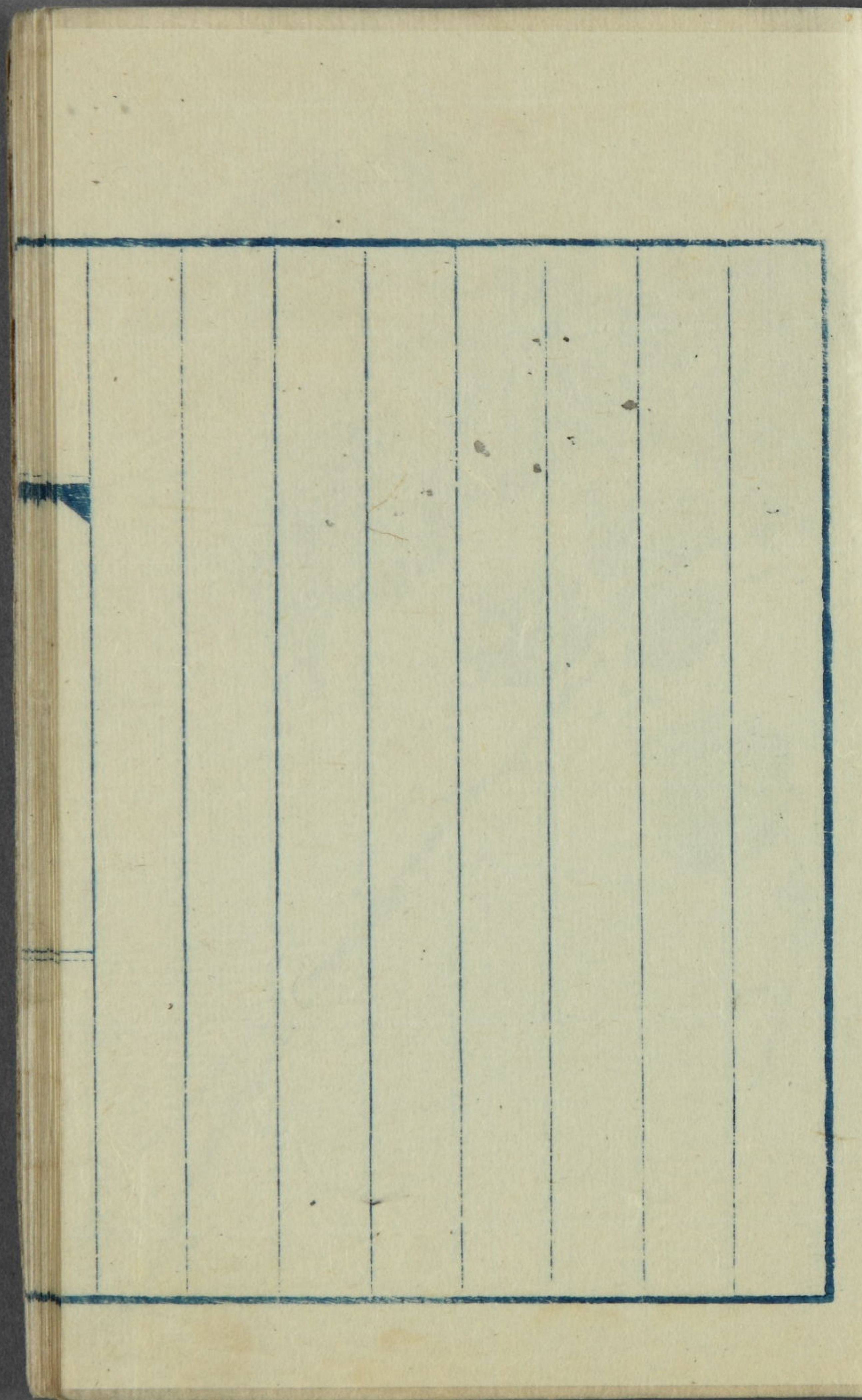




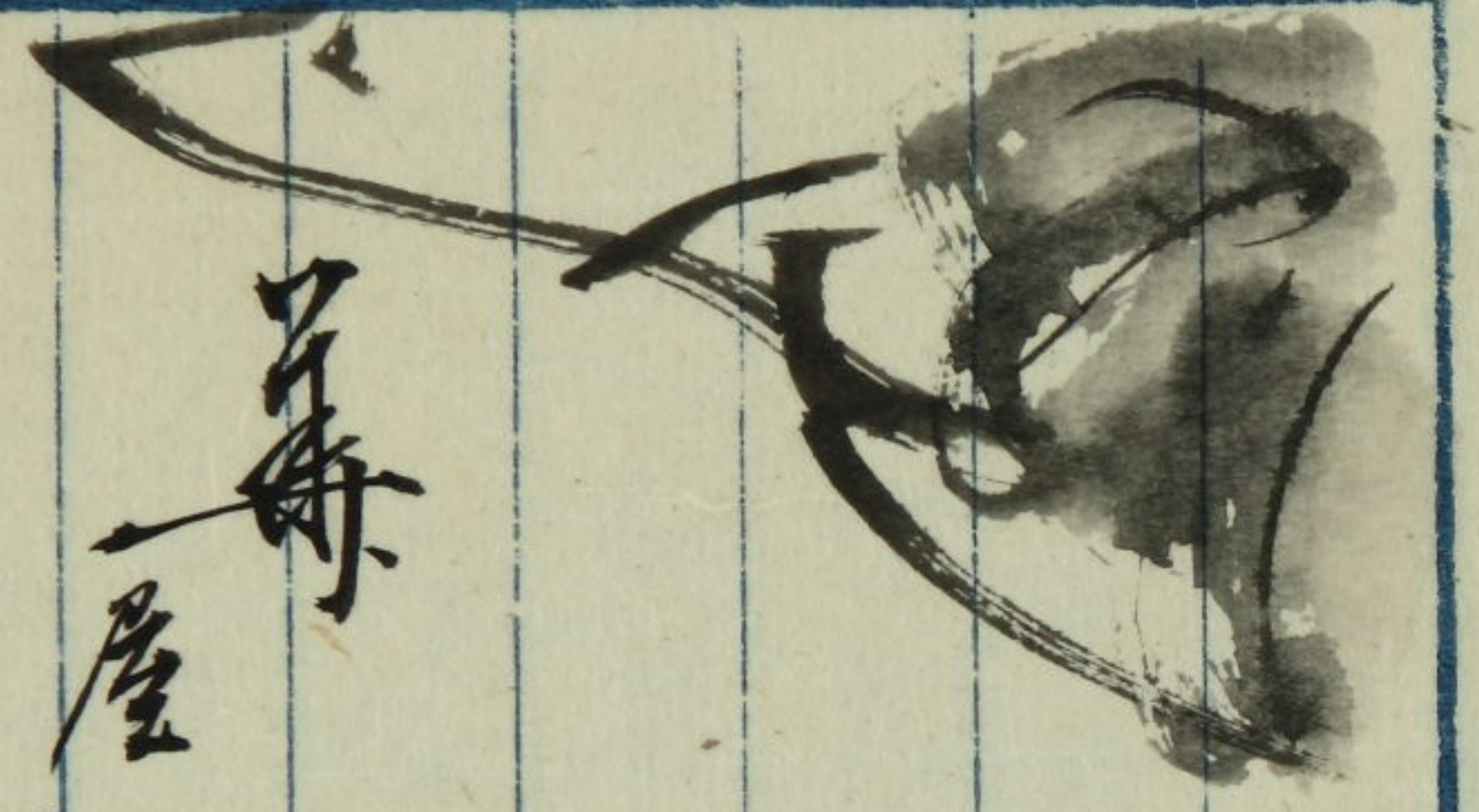
Red seal impression, likely a collector's or artist's mark.











只  
屋





○芙蓉の歌を移し

根名肥前守とくし人の佐々木年囊

中、大陰の人因果の事と歌き

條より、大陰の男よりとゆき、大陰の

女、男よりせまり、文會せり、ののの成のの||

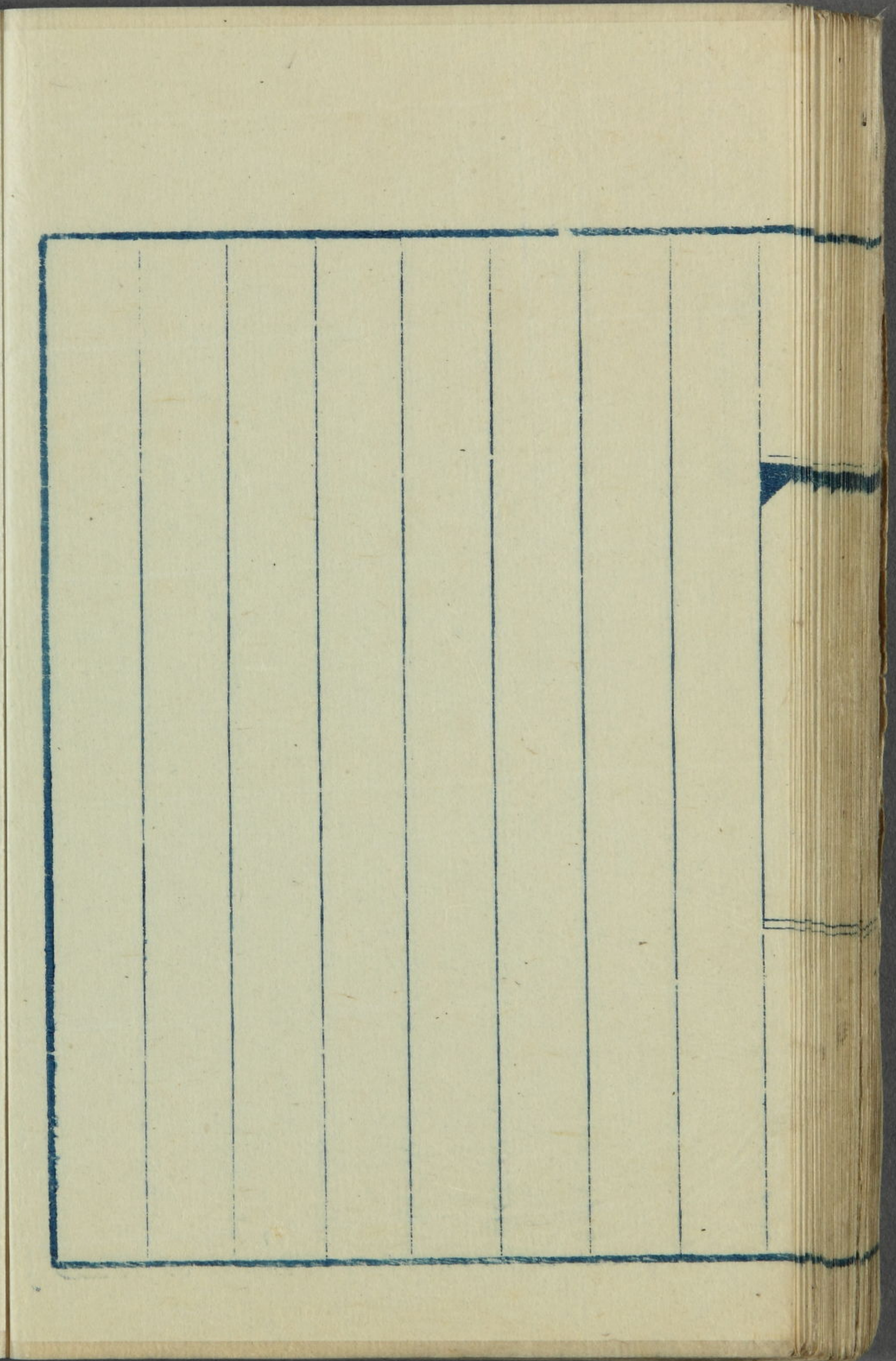
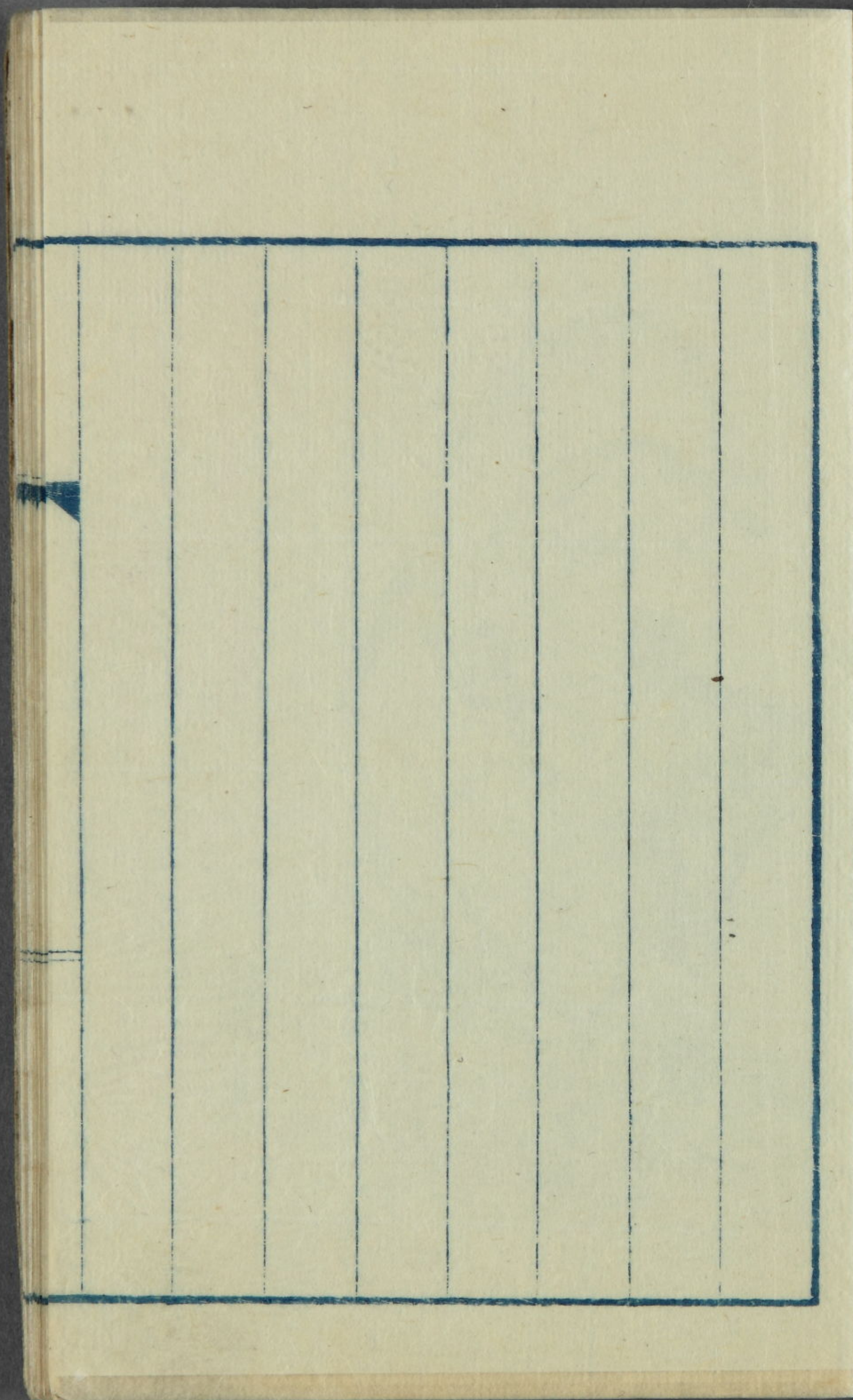
の事ゆぐ芙蓉の歌を移し、アリ

事叶ひたるを云へるもの、かく何り



故  
子  
等  
と  
あ  
は  
り  
ま  
す  
。

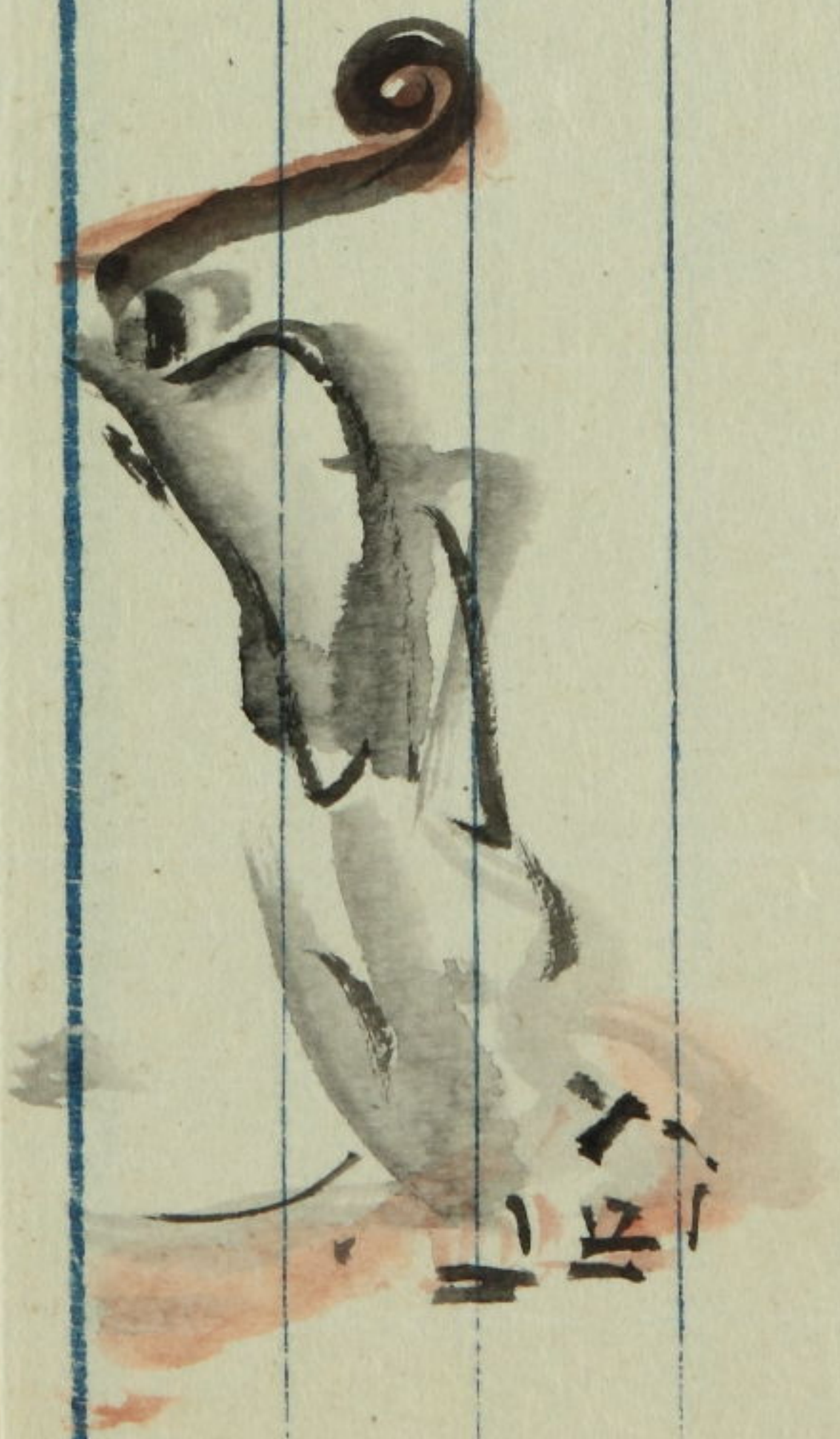








草  
馬



草  
馬  
草  
馬



平家方筈で兵船押してやり  
探出のあつたをづぶつつき通し  
西のうらなち殿のあつたはつた  
継威をもつて槍をぬぐて顔あつた

11  
11  
11  
11  
11



維明治三十七年四月十三日  
録  
雨や為時買辛すの候に  
天の主人よりさしけいせ  
せのはやく初客を失ふ  
予の志は終らん生る所  
を祈す死は何ぞ情世を



恍惚やまぐん哀心で終つて  
送り辞ひてありひをよ  
いふ才ありてあす世く  
君かみよりぬ神をりぬ  
きい狩買と三葉とざりし  
君をどい半く世をいすてつる  
「病者痛正長と日は能は  
位みけつまどまけ世といふ

自然とて雲を騰りて  
雲霞のあることさしておぼ  
ゆるのにおぼよみをかたせ  
短き有偏のきつ路すし  
笑つてさあて帯束の  
細よわ具のあもむし  
尺とせりしに御そま  
雨の縁より柳けおつて



まふくを吊りて日思しく  
 爪垂しく様あつたさし  
 縁のちつたに解さるるく  
 人の心は知りたし  
 といひらぬ水も買ひ  
 君のよき人君の人の  
 社のほりく思ひつゝの  
 買らるるの字とてづら

世とみなるはふ気もはらり  
 夢まに前の慈り刺あり  
 世は悟あはしてさしとひるまぬ  
 其人のともは惜みありとも  
 方をいひてさしとひるまぬ  
 その才むしち懐みらつべし  
 四大世のわつて舍利あり  
 茶食を人をしては財遺了



うつゝのまは清きぬ煙一片  
煙病せし魂いつくよのり  
心の歌いのこる文字の巻  
文字見つてし才とこし  
死しともほろびるもの  
いづちなるがしと猶おの  
云ひしる福おりろ  
文字ほろびず文字  
さるもの

才ほろびす才長くせり  
いづは君長くいのちあり  
いづは君長くいのちあり  
人の心は父まの何ぞ  
明治三十七年四月十日  
初友 幸田高伸



源氏百人一首

百人一首

思澤海滿選

相去重帝

心と記あり和力心ゆひま書書世を換子と云ふありや  
相去重帝

かぎりかてこの歌きあめか解もささの島初  
執負命婦

鈴出乃亦此かぎりり張成行何ん長中夜  
をみさうん



更衣母

よとごしとまのきるるきり  
おきかききききききき

引入の太政大臣

おすびはるるきり  
おしおしおしおしおし

光原氏君 実の太傅院と稱すべし

片小かさなうらみも  
あふあふあふあふあふ

左馬頭

手とりとりとりとり  
おとつかおとつかおとつか

指吟の女

うらみうらみうらみ  
おとつかおとつかおとつか

琴音殿上人

よとごしとまのきるる  
おとつかおとつかおとつか

木枯女

よとごしとまのきるる  
おとつかおとつかおとつか

藤式部丞

よとごしとまのきるる  
おとつかおとつかおとつか



藤原女

あつきの夜をいへばあなをうら  
ひかきも何のむねのうらま

致仕大政大臣

我而の後のつらさなりけり  
あつきの夜をいへばあなをうら

葵上

秋の夜をいへばあなをうら  
ひかきも何のむねのうらま

引入大政大臣

何さうしきさきとまはるる  
あつきの夜をいへばあなをうら

権齋院

秋の夜をいへばあなをうら  
ひかきも何のむねのうらま

空蟬尾

くさきいほのつらさなりけり  
あつきの夜をいへばあなをうら

軒端萩夫

ほのむらさきの風をいへば  
あつきの夜をいへばあなをうら

夕顔上

夕のよりのつらさなりけり  
あつきの夜をいへばあなをうら



夕顔宿女房

こころあこころおぼろげなうらなひの秋の夜

六條御息所

神女ささげささげささげささげささげささげ

中将

船をゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

北山

おきこきこきこきこきこきこきこきこきこき

少納言乳母

初学はおおひやうかきかきかきかきかき

如山僧都

うごしきかきかきかきかきかきかきかき

何果寺

奥山乃松のぼりぼりぼりぼりぼりぼり

笠上

とよりなよしの縁のふかやうを伝へ



中川女

ほろろとくちのうらなひのさだめ  
あはれおぼえつゝなほ五月あつた  
はら

高あつ女院

世のうらにこゝろおぼえしなほ  
浮身よかぬ夢よあつた  
あ

侍従

うねつちのうらなひのおもひはく  
こゝろおぼえつゝなほ五月あつた  
はら

末橋おゆき

あつたおぼえつゝなほ五月あつた  
はら

大輔令婦

うねつちのうらなひのおもひはく  
こゝろおぼえつゝなほ五月あつた  
はら

源内侍

うねつちのうらなひのおもひはく  
こゝろおぼえつゝなほ五月あつた  
はら

源内侍

うねつちのうらなひのおもひはく  
こゝろおぼえつゝなほ五月あつた  
はら

二条太政大臣

うねつちのうらなひのおもひはく  
こゝろおぼえつゝなほ五月あつた  
はら

我宿の花

うねつちのうらなひのおもひはく  
こゝろおぼえつゝなほ五月あつた  
はら



秋好中字

國は神子にあらはれしはあはれなる中すし

式部卿宮

若狭の宮にあらはれしはあはれなる中すし

王命婦

水鏡の宮にあらはれしはあはれなる中すし

雨後離女

たはらひしはあはれなる中すし

赤景殿女御

人目の宮にあらはれしはあはれなる中すし

花教里上

月夜の宮にあらはれしはあはれなる中すし

花教里上

引取の宮にあらはれしはあはれなる中すし

後京推光

この宮にあらはれしはあはれなる中すし



源義経

かきつねの昔のころはついでに  
健甕の友をなす

明石の道

かきつねの昔のころはついでに  
健甕の友をなす

明石上

かきつねの昔のころはついでに  
健甕の友をなす

五郎

かきつねの昔のころはついでに  
健甕の友をなす

平内侍

伊豫のころはついでに  
健甕の友をなす

大内侍

かきつねの昔のころはついでに  
健甕の友をなす

明石

かきつねの昔のころはついでに  
健甕の友をなす

朱雀院

かきつねの昔のころはついでに  
健甕の友をなす



冷泉院

自のすむ川のさよふけるさよふける  
樹のうげさのうげさのうげさ

題中

うき雲千丈とあまの月影の  
すまじきこころのうき雲の

右大辨

雲のうき雲のうき雲のうき雲の  
雲のうき雲のうき雲のうき雲の

明石乳母

や同のうき雲のうき雲のうき雲の  
心のうき雲のうき雲のうき雲の

夕雲左大老

夕雲のうき雲のうき雲のうき雲の  
夕雲のうき雲のうき雲のうき雲の

雲井雅上

雲井のうき雲のうき雲のうき雲の  
雲井のうき雲のうき雲のうき雲の

雲井雅上

雲井のうき雲のうき雲のうき雲の  
雲井のうき雲のうき雲のうき雲の

兵部卿

兵部のうき雲のうき雲のうき雲の  
兵部のうき雲のうき雲のうき雲の







中將  
御前  
御前  
御前

急上女房

おまのこころのしるしをなまじくおぼえしり

春白女房

春の日のしらべをいそいでしるしをたづね

柏木右衛門督

ゆきやまのしるしをいそいでしるしをたづね

紅梅右大臣

あまのしるしをいそいでしるしをたづね

近江米

おまのしるしをいそいでしるしをたづね

中納言

あまのしるしをいそいでしるしをたづね

鬚黒右大臣

あまのしるしをいそいでしるしをたづね

左大臣督

あまのしるしをいそいでしるしをたづね

御前  
御前  
御前







小將  
おのれは...  
おのれは...

中務の果

ちりり...  
おのれは...

三原女三宮

うさぎ...  
おのれは...

一条御息所

おのれは...  
おのれは...

藤原の行方

おのれは...  
おのれは...

物乞童

おのれは...  
おのれは...

六条院中將

おのれは...  
おのれは...

佛名導師

おのれは...  
おのれは...

梅花女房

おのれは...  
おのれは...

おのれは...  
おのれは...







白兵部  
白兵部  
白兵部

世英大将

山おろし  
山おろし  
山おろし

竹川女房

竹川女房  
竹川女房  
竹川女房

優婆塞

優婆塞  
優婆塞  
優婆塞

總解

總解  
總解  
總解

白兵部

白兵部  
白兵部  
白兵部

遠近

遠近  
遠近  
遠近

浮舟

浮舟  
浮舟  
浮舟

宰相

宰相  
宰相  
宰相

行  
行  
行



二宗院大徳  
何の事か  
此の事か

右海軍督

つづき  
この事か

宮大夫

この事か

宇治律師

この事か

辯士

この事か



13.12.13.



